

万葉的なるものの二の様式

久松潜一

万葉集の性格いわば万葉的なるものを把握するのに一の特色をあげること必要であるし、また一の特色で表そうとする場合が多い。万葉的なるものを素朴というのもそれである。真淵が万葉歌風をますらをぶりと言ったのもそれである。真淵のいうますらをぶりと言うのは真情を率直に表現する所からくる力強い調をますらをぶりというのである。それに対して古今集をはじめとする平安時代の歌風をたわやめぶりと云っている。万葉集を古今集や新古今集と対比して、その特色をのべる時一の特色を挙げることは必要となる。契沖は万葉代匠記の精撰本の総説に万葉集は高く大きなり、なりは奇怪ならず、心を入れずなどの特色をあげ、古今集については高く大きな点は劣る。なりはやゝ面白し、心あるさまにつくるなどの特色をあげ、後の集はなりはいかで作出でしがなと巧む。心を付けて景趣大からむと言っている、後の集は新古今集をさしているのである。万葉集と古今集との特色を対比的にのべることは、俊成の古来風体抄や為兼の為兼卿和歌抄にすでに見えているが、新古今集をも挙げて三歌集の特色をのべたのは契沖がはじめであろう。

近代になってからは子規は万葉集を写生という特色のもとに説いている。また万葉集の歌を庶民的という点からといた説もあり、これを抒情詩として性格づける説もある。私も「万葉集の新研究」で万葉集の歌は「まこと」でありまた抒情精神で貫かれていると説いたことがある。ただこういう一の特色でとく場合、それは誤ではないが、全体の性格を尽くし得ない憾みも残る。万葉集は庶民文学という時、一方で津田左右吉氏は万葉集を貴族文学の一として居

り、西郷信綱氏も「貴族文学としての万葉集」を著している。万葉集を「ますらをぶり」の文学とする説に対して、岡崎義恵氏は万葉集の女性的性格を挙げて居り、武田祐吉氏にも「女身万葉」の著がある。万葉集を素朴の文学とする時、万葉集を爛熟の文学とする見方もないではない。

万葉集を他の古今集や新古今集と比較する時、一の特色で説明することが必要となるが万葉集を内部から見れば一の特色で説明しつくすことは出来ない。その中に二もしくは三もしくはそれ以上の性格や特質がつつまれている。万葉集の中に素朴な性格もあるが爛熟という性格もないではない。庶民文学的性格もあるが、貴族文学的性格もないではない。ただどちらが主調をなしているかと言うことは問題になるが、一の性格ですべてを尽くすことは出来ない。そこで万葉的なものを扱うに当って一の性格で説明することを否定するのではないが、二の性格や特質を挙げて見ることが必要である。万葉的なものの二様式と名づけたのはそのためである。

二

万葉の二様式という点から見ると、これを縦に展開の上から二の様式をとりあげることも出来、これを横に併立する上から二の様式をとりあげることも出来る。所謂、通時的に言えば万葉の中に素朴なものど爛熟なものどを見ることが出来る。シルレルのいう素朴の文学と情念の文学とを万葉の中に見られるのである。万葉の含まれている年代を見ると仁徳天皇の磐姫皇后の御歌と言われるものから天平宝字三年の家持の因幡の歌までを数えると四百五十年になる。しかし磐姫皇后の御歌とあるのは軽郎女の歌が原形であるらしく、それによって年代は縮まるのであるが、それにしても、はじめの頃は記紀歌謡と年代的に重複して居り、万葉時代と言うのは、舒明天皇の時代の歌あたりからさすがに適當である。それからでも百三十年になる。この間に万葉の歌も歌風的にも変化してゆくのが当然である。縦の関係から言えば到底一の歌風で律し得ないのである。初期万葉の頃の歌を素朴の歌とすることは当っているし、奈良時代の中期以降の歌を情念的、もしくは感傷的もしくは爛熟的であると言うことは出来る。このような点から縦の関係から二の様式にわけて見ることも出来る。

比較文学的に中国詩の影響の上から言えば、万葉集は詩経的か文選的かという問題は一の問題になる。私の若い頃

には諸橋氏の詩経研究に見られるように詩経と万葉集との関係が多く扱われたが、近時、比較文学的研究が盛んになつてからは万葉集と六朝時代の文選や玉台新詠との関係が多く扱われている。影響関係から言えば万葉集の雑歌、挽歌等の分類の方法をはじめ詞句の上でも文選の影響が多いことは小島憲之氏の「上代日本文学と中国文学」にも考証されている所である。もつとも万葉集の卷十四に東歌の一巻があるのは詩経の国風の影響ではあるまいか、詩経の国風の詩を見ると「関々睢鳩」の詩にしても「桃之夭夭」の詩にしても同じ詞句の繰返しが多いのは謡われた詩であることを示している。

桃之夭夭灼灼其華

之子干歸宜其室家

桃之夭夭有其實

之子干歸宜其家室

桃之夭夭其葉蓁蓁

之子干歸宜其家人

六句は二句づつから成っているが、同じ詞句をやや詞を変えて繰返している。このような謡われた性質から言えば詩経は記紀歌謡に近いとも言えるが、万葉集にも歌謡と見られる歌も多く、素朴なる歌も多い点から言えば詩経的な性格を有している。然し大伴旅人、山上憶良の歌から大伴家持に至る年代の歌には文選の影響が多く、歌風的にも文選的であると言える。歌風の言え万葉集には詩経的なものと文選や玉台新詠的なものをも備えている。そのいづれに中心があるかという点から言えば万葉は詩経的であり、古今は文選的であると言えなくはないが、ここでは万葉の中に詩経的と文選的なものとをともに有していることを言いたい。それは影響の上から見ても展開の上から見ても万葉の二様式と言えるのである。

そうして万葉に於ける初期万葉の歌や東歌を詩経的と見、旅人憶良から家持に至る歌を文選的と見る時、人麿はどちらに属するかが問題になる。中西進氏の言うごとく人麿の長歌に辞賦の影響の著しきを認めてこれを文選的であるとする事も出来るが、然し人麿の歌には歌謡的な点もある。殊に人麿歌集の中には歌謡的なものが多いのであり、

人麿歌集の歌の多くを人麿の作と認められれば人麿には詩経的なものも多く存すると言える。人麿の中に詩経的なものと文選的なものとの二様式を認めることも出来るであらう。

三

縦の関係から見た万葉の二様式に対して、横の関係からも二様式を見られる。美意識から言うとな葉集の美は清の美としてとりあげられることは高木市之助氏の論がある。万葉集に於て清の美は最も中心的な美と言える。清は純粹感情の美と言えるし、自然については清き月夜、清き川の音のように多く見られる。清純な美として万葉集に見られるのみならず、平安時代以降においても意識的に清し、清げ、清ら等の語としてとりあげられている。ただ万葉の美は清だけでは表されない。一方に明の美がある。明は明るい美である。自然においても太陽の明るさであるが、心からいうと理性的な美である。万葉集の美は清と明とが二の様式として存している。清と明とは対立的な美であるがそれが融合し、調和されたのが清明の美である。

清明という語は、

わだつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜清明己曾(一五)

の歌にも見られる。清明己曾については「あきらけくこそ」という訓が行われているが、これを「きよらけくこそ」とする訓もあり、「きよくあかくこそ」「きよくてりこそ」「まさやけくこそ」「さやけかりこそ」など種々の訓が出されている。「あきらけくこそ」のように形容詞に「こそ」がついた場合は「あきらけくこそあれ」という推測の意になり「さやけかりこそ」のように形容動詞にこそが付いた場合は願望の意になるので、歌一首の意味も変ってくるが清明を「あきらけく」または「きよらけく」のように明もしくは清の一方だけで訓ずると、清と明とを一体として「さやか」とよむのでは美のとりあげ方が異なってくる。清と明とを一として訓ずる時、「さやか」となることは十分あり得るのである。満月などは清くて明るい美であり、「さやか」である。清と明とは一にもなるが、万葉の美は清の美と明の美として二の美的様式として見ることも出来る。

そうして清と明とは万葉集の様式として見る場合、時間的に清の美から明の美に展開するのではなく共時的

に清の美と明の美とが見られる。歌人として見る時、山部赤人は清の歌人と言えるならば山上憶良は明の歌人と言える。この二人はその上では対立的に見られるのであるが、年代的に言えば同時代の歌人と言える。赤人には天皇行幸の供奉の歌が多い。卷六に見られるように奈良時代のはじめ神龜元年十月五日の紀伊国に幸せられた時和歌の浦でよんだ歌をはじめ、神龜から天平にかけての歌が多くその頃の歌人である。憶良も

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（六三）

の歌は大宝二年頃の歌と見られるが、卷五の歌は、神龜五年から天平五年までの歌である。赤人の方がやや後まで生きていたがほぼ同年代の歌人である。憶良の

をのこやも空しかるべき万代に語りつくべき名は立てずして（九七八）

が恐らく天平五年の歌であるに対して赤人の歌では天平八年六月芳野離宮に幸された時、赤人が詔に応えて作んだ歌が年代のわかった最後の歌であるから、赤人は数年後まで生きたのであろう。赤人は播磨風土記の夫木郡比治の里の条に山部比治があり、同郡穴師の里の条にも山部三馬の名が見えて居り、日本書紀の顕宗紀元年夏四月の詔に播磨の国の司来目部小楯の功に対し、願わしいことをのべよと仰せられると小楯が山の官は願わしいと申したので山の官に任じ改めて姓山部連を賜うたとある。赤人もこれらと関係あるらしく、さすれば播磨の出身であるとも見られる。山に關係ある職であり、それ故に自然に多く接したのであろう。赤人ははじめから自然の中に生きた伝統的な歌人であった。そうして自然の中に清らかな美を見出した歌人であった。赤人は自然の中に清の美を見出したのみでなく人生の中にも清の美を求めた。赤人が東海道を通って富士山の美をうたうとともに東国へ来て真間手児名の墓を訪うて歌をよんでいる。赤人は手児名の生き方に清らかさを見出し、これを歌ったのである。このように自然に於ても人生に於ても清らかな美を追求し、それを歌によんだのが赤人であった。

これに比べると憶良の出自については諸説があり、帰化人であるとの説もあるが、いづれにしても儒学系統の学問に深く、それ故に遣唐小録にもなり、東宮侍講にもなったのであろう。そういう学究的な態度は憶良の一貫した所である。その歌にも学究的な傾向が強く、令反感情歌はその最も著しい例であるが、その他の歌にもその傾向はある。そこに知的傾向が見られる。憶良は生老病死の悲みをうたい、貧窮の苦しみを切々とうたって人生を絶望したように

見えるが、しかしそのために絶望してしまわない。どんなに苦しくともこれが世間の道であるとして、その中ですこしでもよりよく生きてゆこうとする。

世間よのなかをうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にはあらねば（八九三）
と諦念の意をうたうのである。

ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りてなりをしまさに（八〇一）

ともうたっている。ここに理性的な態度が見られる。憶良はその点で明の歌人の典型と言えるのである。自然を殆どうたわず貧窮問答には「ぬえ鳥のどよひ居るに」云々とぬえ鳥がうたわれている。赤人が和歌の浦にしほがみちて来ると「田鶴なきわたる」とうたひ「清き河原に千鳥しば鳴く」とうたつたのと相違している。

このように赤人と憶良とは対照的である。清の美と明の美をそれぞれうたつた点で同年代の歌人における二の様式と言える。そうして万葉には清の歌人の系列としては長意吉麻呂、志貴皇子、湯原王などがあげられると言えるし、明の歌人としては大伴旅人その他を挙げられるであろう。憶良と旅人とは対立的な点もあることすでに高木氏の説かれる所であるが、明の歌人という点から言えば同じ様式の歌人と言うべきであろう。

そうして赤人、憶良より前代の歌人である柿本人麿は清と明とが未だわかれぬ以前の清明一体の歌人であり、大伴家持になると、赤人の清と憶良の明とを新しく綜合しようとした歌人と見るべきであろう。このようにして万葉に於ける共時的な関係に於ける二の様式を、赤人と憶良ならびにそれらの系列に於て見出し得るのである。

附記 今年（昭和四十四年）六月、上代文学会に於て語つたものの要旨である。万葉に於ける詩經的と文選的との二の様式につ

いては、今年一月に短歌研究に発表したもので、ここではそれにゆづつた点が多い。